

自ら動かして治す、保存療法。

手術とリハビリテーションの関係

(菅谷)

手術は、あくまで治療の中にある一つのオプションでしかありません。手術とリハビリテーションは、治療として同等に成り立つものだと思っています。手術後のリハビリテーションは絶対に欠かせません。

(高村)

菅谷先生は、手術をすれば治るとは思っていない医師だと思います。数多くの患者さんを診てきて、手術の後が大変であることを知っています。リハビリテーションは、手術で身体の構造は治したけれど、全く動かないという状態をどのようにして動くようにしていくのかを考えます。第2幕のはじまりです。私自身の経験から、手術の技術によってもリハビリの大変さは変わり、肩疾患に関しては、手術だけで良くなるということはないと言えます。

(菅谷)

股関節もそうですが、肩肘分野はより一層、リハビリなしで手術することはお勧めできません。手術をする際は、技術と経験を積んだ理学療法士と、しっかりと連携の取れている先生を選んでほしいと思います。

テーマは、能動的

(高村)

私たちのリハビリのテーマは、能動的です。20数年前の治療は、お医者様に治してもらおう、やってもらおうという、受身の治療が主流でした。患者さんの筋力や柔軟性を改善するためには、私たち理学療法士が代わりに行って意味が無いことを理解してもらおう事を大切にしています。当時は、なんで痛いのに運動しなきゃいけないのか、やりたくない、と皆さんが口々に言っていました。コツコツやって成果が出始め、様々な年代の方々が運動している姿を見て、私もやりますとなくなっていきました。そういった環境を作ること大切ですし、運動が大切であることを理解してもらうために、変化を実感できるインパクトのある治療を行えることも大切だと思っています。

(菅谷)

いくら腕のいい理学療法士が待っていても、医師の保証がない状態でリハビリを行うことになれば、患者さんも理学療法士を信頼することはなかなかできないと思っています。患者さんにはリハビリに行かせる前の診療の段階で、構造ではなく機能の問題だから手術でも何でもないと、リハビリ治療しかないこと、手術など私の出番はないこと、リハビリで治らなかったらもう治らないですよ、はっきり伝えていきます。そうすると患者さんは、自分の肩は壊れていないんだと思い、理学療法士を頼ってリハビリに臨むことができます。これも一つ、連携だと思っています。

(高村)

逆に私たちは、これは手術が必要かもしれないという症状に対して、手術せずに治療を終わらせるという保存療法の究極を目指しています。すべてにおいて手術が良くないということではなく、適切に手術をしておかなければいけない場合もあります。ですが、手術をするべきか、ぎりぎりの判断を迫られることも少なくありません。

(菅谷)

その通りで、手術か保存か、ボーダーラインのときもあります。そういったときも、まずはリハビリをやりながら様子を見ます。経過診療には高村も介入をして、ディスカッションをしていきます。本人はいつ戻りたいのか、状態をどう診るか。そうしたディスカッションから、やはり手術が必要となれば手術を行い、もう少し保存を続けてみるとなれば続ける選択をしています。そうしたコミュニケーションも大切にしています。

保存療法 × ホグレル

(高村)

ホグレルは、野球選手やトップアスリートの他に、学生や身体の使い方を求めている方にも、できる限り、使用していきたいと思っています。局所のみ改善ではなく、患者さん自ら動かす、機能改善を中心とした治療を行っていきたいです。動きが基本になるので、自分の姿を確認しながら動いてもらえるようにと、リハビリエリアは鏡張りにしています。視覚も使って自分の動きを確かめながら、理想の動きに近づいていってほしいと思います。

(菅谷)

保存療法という治療の中に運動が入り、運動療法の中にホグレルが在りという感じでしょうか。現在もアスリート、選手たちをサポートしていますが、将来的には保険診療だけではなく、自由診療を増やし、そういったサポートも強めていけるようなチームTSOC Physioを作りたいと思います。

